様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	学校臨床実践コース ／小坂　浩嗣

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教育大学教員としての授業実践

本学の目的は，豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し，学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには，教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が，学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは，教員養成大学の教員として，本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか，これまでの取り組み状況を総括し，具体的に示して欲しい。

1．目標・計画

教職大学院開設以来，学校現場で活躍できる生徒指導実践力を有した教員養成を目指し，事例研究法を中心にした指導内容と方法について授業実践に取り組み，授業評価などから一定の成果を得た。しかしながら，いくつかの課題も残されておりそれらに本年度は取り組みたい。
①生徒指導の実践に関する経験知に理論知を裏打ちするため，実践事例についての過程分析法による検討に取り組みたい。
②受講生のワークショップ型授業形態により，教員と院生との協働による授業展開を考えたい。
③授業で分析した事例過程の特徴を明示化できるツールの開発に取り組みたい。

2．点検・評価

①については，ライフライン研究を参考にして不登校事例の支援過程の記述方法を考案し，公開講座等の機会を活用して試行実践した。その効果検証は次年度の課題とした。
②ついては，後期の「生徒指導・教育相談の実践と課題」において，院生への予習を組み合わせた授業展開を実践した後，院生による授業評価をもとに効果検証した結果，約80％から授業理解のレディネスアップに効果があったとの回答を得たことから，その有用性が認められた。
③については，①検証結果をもとにプロセスライン法の改善に継続して取り組んでいるところである。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

①教職大学院学生の学校課題フィールドワークに関わって，フィールドでの実地指導を積極的に進めていく。
②学生からの学習や生活等の相談が受けやすいように，オフィスアワーの明示と研究室の敷居を下げる雰囲気作りに努める。
③1年次生と2年次生との学生間の交流を図るため，学生主体の研究会や行事の立案・計画・運営を推進する。

２．点検・評価

①については，２年次生４名に対して一人あたり平均して月１回で実習先へ訪問指導した結果，院生からはタイムリーなアドバイス等が得られ実践の効率性が上がったとの評価を得た。
②については，実習指導院生以外にも教職大学院や修士課程院生の来談もあった。また，教員も来談して業務に関する他に，個人的相談にも応じることがあった。
③については，8月に開催した鳴門生徒指導学会，9月に開催した日本NIE学会，11月に開催した日本生徒指導学会の運営に係わり，学生間の学術的交流や協働を図ることができた。後期には京都教育大学との交流を実施したが，自身は学術研究集会と日程が重なり参加できなかった。

Ⅱ－２．研究

１．目標・計画

①「鈴鹿市の教育委員会及び学校と鳴門教育大学が協働的な関係を構築する」研究に係わって，研究分担者として支援法の開発と支援の実際に従事する。
②学校現場における生徒指導・教育相談に関わる実践的知見の体系化について，実践事例等の資料を追加収集する。
③生徒指導・教育相談に関わる実践事例をもとにした事例検討・事例研究法の開発に関わって，学校現場で事例検討会を計画・実践し検証する。

２．点検・評価

①については，研究課題のユニバーサルデザインについての勉強会を開催後，研究計画を立案したが，実施にまで至ることができず次年度に持ち越しとなった。ただ，ユニバーサルデザインに係る院生の実習について，その成果をまとめたリーフレットを作成・配布することができた。
②については，授業を通して収集した事例を，鳴門生徒指導事例集としてまとめることができた。
③については，8月に実施した公開講座での事例研究法について，受講者にアンケートを実施したがその分析と結果をまとめるまでに至っていない。また，学校現場での事例検討会は1校のみ実施することができ，参加した教員からは指導上に役立ったとの評価を得た。

Ⅱ－３．大学運営

１．目標・計画

①教職大学院副専攻長として専攻の円滑な運営に努める。
②大学院入試委員として，厳正かつ公正な入試業務に努める。
③精神保健相談員として，教職員や学生のメンタルヘルスに努める。
④心理・教育相談室の相談員として，相談室の運営に努める。

２．点検・評価

①については，専攻長とともに専攻に係るルーチンワークは概ね円滑に務められた。特に6月以降の専攻改革に取り組み，平成25年度からの新カリキュラム実施への道筋をつけることができた。
②については，学生募集に係わり学内外の入試説明会に進んで取り組んだ。また，大学訪問においては新規に4大学を開拓し，それらに訪問して就職担当教員や事務職員と面談して学生募集に積極的に取り組んだ。
③については，正式受理による来談依頼者はなかった。それ以外に個別に単発で来談者が数名あった。
④については，４名の来談者を継続担当し，次年度に引き継ぐ予定である。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

①平成16年度から継続しているスクールカウンセラーとして，地域の小・中学校に出向き積極的に地域貢献に努める。
②公開講座の開催や支援講師アドバイザーを通して，大学と地域や学校現場との連携関係の構築に努める。
③日本生徒指導学会理事として，学会運営や四国支部研究会の運営に努める。

2．点検・評価

①については，年度中に通常任務に加えて，東日本大震災に係る被災者支援として2事例を継続して支援した。
②については，公開講座を1講座を8月に高槻市で開催し，約30名の参加者があった。また，支援アドバイザーとして3校からの依頼に応じて務め，参加者から好評を得た。
③については，11月の第12回大会に向けて，フォーラム「生徒指導にスクールカウンセラーをどう活かすか」のテーマで企画し，約100名の参加者があり，参加者へのアンケート結果からも好評であった。また，平成24年2月に四国支部研究会を準備・運営した。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）